

『百人一首』 中村素堂先生の仮名散らし書きの魅力 (三九)

有明ありあけのつれなく見えし別れより

暁あけぼのばかり憂うれきものはなし

壬生みぶの 忠岑ただみね

〈歌意〉

「夜が明けてもそっけなく空に残る有明の月のように、あなたが無情で冷淡に見えたあの暁の別れ以来、明け方ほどつらいものはない。」

この歌は『古今集』(恋・六二五番)に出ています。

(壬生忠岑)

生没年未詳。『古今和歌集』撰者の一人。

〈よみ〉

有明のつれ

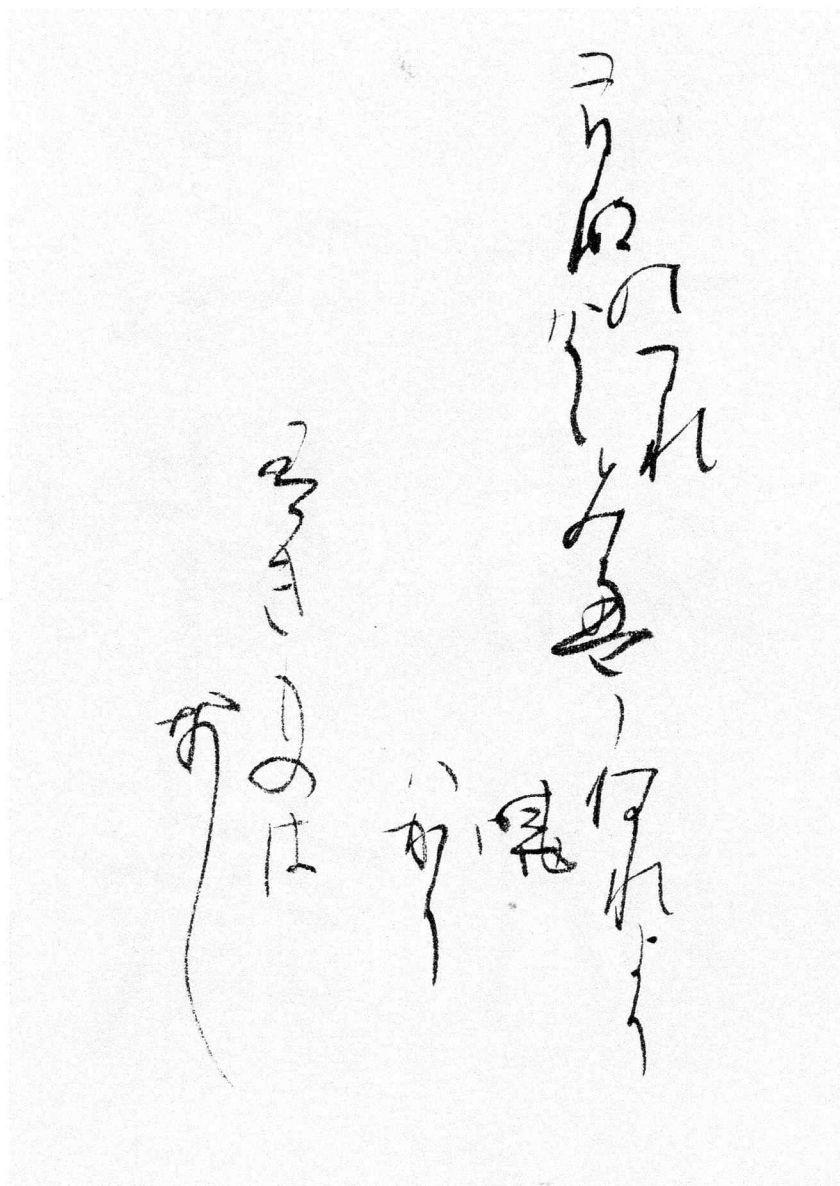
なくみ盈えしわ可かれより

暁あけぼの

ハはかり

有うきものは

なし



中村素堂先生の書

晝間欽堂先生提供

上の句の密と下の句の空間の調和が参考になるかと思えます。作品にしてみてくださいださることを期待します。

(青藍)